これもプレイの一環なのだと今更ながらに悟り、ロマーリオの思惑通りに翻弄されまくっている自分が悔しいやら情けないやらで。
ディーノはむぅと拗ねたように唇を尖らせながら膝と足をピッタリと閉じると、気休めだとは思いつつもワンピースの裾を更に引き下げた。
（くっそー、あんのエロオヤジっ！）
こうしている間にも、どこかで羞恥に悶える自分を見つめながらほくそ笑んでいるのだろう。
そう考え始めると、見えない視線までもが急に意識しだされ、身体の熱がぶり返してきてしまう。
（ロマには感づかれてんのかな……こんなことして、恥ずかしいだけじゃなく興奮しちまってるって。もし……もしバレたら……オレ、どうされちゃうんだろ……）
一度浮かんだ思考は留まることを知らず、自身の困惑を余所にどんどんと膨らんでいって。
そんなことをふと思い至った瞬間、ニヤニヤといやらしい笑みを湛えるロマーリオの顔が脳裏に姿を現した。
『一体どうしたんだ？　顔真っ赤にして、足モジモジさせて。まさか……興奮してる、なんてことはねぇよな？』
（!?）
低音の囁き声まで耳の奥に鮮明に蘇り、ムズムズするような擽ったさに顔がかぁっと熱くなる。
（こっ、こんなトコでいきなり何考えてんだ、オレ!!）
突然降って沸いた妄想を追い出すように頭をふるふると左右に振るが、その姿は消えてくれない。
それどころか、彼は己の脳内存在であるにもかかわらず、まるで自らの意思を持っているかのようにじぃっと瞳の奥を覗き込んできた。
自分でも気付かない感情や欲望ですら見透かしてしまうような、静かで熱い眼差し。
それに捕らえられると、見えない鎖で拘束されたように動けなくなってしまう。
『本当にノーブラノーパンで外出するなんて変態なこと、アンタがするとはなぁ……』
目を逸らしたいのに、視線すら動かせない。
真っ直ぐに見つめられ、囁かれ、身体の芯がキュンと切なく疼く。
（ロマが……言ったんじゃねーか……）
それでも何とか声を絞り出し、言い訳のような言葉を呟くが、それはすぐに切り返されてしまった。
『何言ってんだ。最初におねだりしてきたのはアンタだろう？変わったエッチがしたいって』
（そ、そうだけど……）
『それに、オレは提案しただけだ。強制した覚えはないぜ？』
（うっ……）